

---

# 光と闇、それが世界。

神影 零緋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

光と闇、それが世界。

### 【Nコード】

N1798V

### 【作者名】

神影 零緋

### 【あらすじ】

車に轢かれた少女が来たのは黒い空間。「転プレさせるのって意外に簡単だな」え。誰ですか？

冷静(?)少女が廻る

一つの物語が始まる…

かな(オイ)。

シリアスもギャグも

てんこ盛り状態です

## 主人公設定（前書き）

とりあえず

主人公ですかね。

設定です。

## 主人公設定

主人公

名前：汐海しおつみ 波音なみね

年齢：ツナと同じ。

誕生日：9月19日

星座：乙女座

血液型：A型

身長：164.2?

体重：35?

出身国：日本

利き腕：右

好きな事・物：歌、植物、仲間

嫌いな事・物：自己中人、いじめ

趣味：歌う（特にボカロ）

スキル：身体能力

好きな色：青、黒、白

瞳：青緑　カラコンで黒

髪：黒に近い青

一人称：ぼく、怒ると俺

容姿：KHのシオン風

性格：敬語、過去暗し

武器：異常と過負荷

属性：月＋全部

一言：「…これから…宜しくお願いします。」

堅っ!?

## 主人公設定（後書き）

あはは

何がおこるんでしょ

KHとはキングダムハーツのことですVV

亀更新ですが

気長に待ってやって

おくれ〜。

## 1・転生…ですか。

「…おはようございます」

これがぼく、汐海 波音の始まりだ。

朝ご飯を食べ、用意（鞆）の中は漫画のみ（）をして

「…行ってきます」

と言っても家の中は無人。

家族など、とうの昔に居ないのだが。

これで一日は同じに進む…ハズだった。

授業中は漫画を読んで…

漫画？モチロン【REBORN!】ですよ。

さっさと家に帰って寝て…

…とまあこうなるハズだったんです。そう、だった。

どうなったかは長くなるんですが…

さて、ぼくの家は車通りが少なく、通学路として活用されてたんで

すが

たまたま…たまたまなのか故意なのか

車が突っ込んで来たんですよ。

的…確…に…ぼ…く…に…向…か…つ…て…。

「…え？」

キキイイイイ、ドンッ

とまあ、轢かれたわけで。

どうなったかと言うと…。

今、黒い、真っ黒の空間に一人でいます。

「……どうでしょう」

…漫画入った鞆忘れてきたか「お、起きたか」…ん？

？「転プレさせるのって意外と簡単に出来るんだな」  
え？

「……とりあえず…誰ですか？」

「ああ、自己紹介だな。俺は神だ。名前はディオだ」

…ディオ…と言つと…

「イタリア語で神…でしたっけ」

「お。よく知ってるな」

「まあ、【REBORN!】のために米・伊とかの言語系は…」

「!!その漫画知ってるのか。なら話は早い。」

…【REBORN!】の世界に行ってくれ!

「いいですが何故?」

「即おk!?じゃあこつちだ。来い!」

…普通にスルーですか。

「はいはい。そつちですね」

神の後ろを波音は溜め息を吐き小走りで追った。

1・転生…ですか。(後書き)

…いう事がない。

とりあえず、ボカロの  
アンハッピーリフレイン聞きます。  
みんなも聞いてみてね

## 2・設定完了ですね

神：もといディアが止まった先には一人の女性が居た。

？「おお！待ったとっただえ！」

「…えっと…？」

「こいつは「こいつって言うなや！」摘花だ。同じ神」

「無視か！…まあよろしくな！」

「…摘花つて後ろから読んだらかmi「ストローリップ！」

「それ以上はアカンて！」

「…ここに来た理由は？「無視！？」」

「ああ、特典を選んでもらう」

「…特典？」

「LV・UP！的なもんや」

「【REBORN！】に行くんですもんね」

「物分りが良くて助かる。まずは…武器」

「二次元の武器ならいけるで！」

「…【めだかボックス】って大丈夫ですか？」

「えっと…悪平等以外なら」

「なら…異常と過負荷で」

「ん。分かったで」

「次はスキルだな」

「…スキル？武器が十二分にスキルですが？」

「そうじゃない。動体視力、体力、攻撃力、防御力、身体能力だ」

「ああ。そういう…」

「全部90%まで上げる」

…すごいな、オイ。

「そのなかで2つのみ100%にできる」

「…なら身体能力と…体力で」

「！…ほう。攻撃や防御を選ばないのか」

「90までいくなら持久力を」

「おっけ。あとは…属性やで！！」

「全部…って言いたいんですが」

「が？なんだ？」

「オリジナルって出来ます？」

「…！！…」

波音の言葉に二人は固まった。

（ん？表情がかたまつた？）

「…星以外ならなんとかいけると思っわ」

「月はいけます？」

「いけるで！！」

「じゃあそれをお願いします。」

「ふむ、承った。…」

「まだ…話は残ってますよね？」

「…！！…」

「僕が此処にきた理由は？」

「…っ…！！…」

ディオは息を呑む。

しばらくの沈黙。そして

「では、話すぞ」

ディアが声を絞り出すように……話し始めた。

## 2・設定完了ですね(後書き)

途中の波音の言葉

「摘花つて後ろから読むと」  
意味が分かったでしょうか？

摘花 つみか かみつ かみつー 神2

となります！

ちよおつと強引過ぎたかな？

### 3・異常…ですか。

「あの世界に…異常イレギュラーがいる」

「…それは…僕みたいなの？」

「違う。お前は俺が故意に連れてきたんだ」

「それは世界自体の…いわゆるバグやねん」

「つまり転プレヤトリップではない…」

いるはずの無いはじめからいるもの…?」

「そつだ。それを止めるには世界の中に行くしかない」

「でも神様ってゆうのは中には入れられへん。…何があっても」

「外からのサポートは出来るんだが…」

「それで僕が選ばれたと」

「ああ。その世界を楽しんでいない者を探していな」

「…確かに。あの世界は退屈だ」

…平凡すぎて。と波音は付け加えた。

「だからお前を呼んだ」

「そうですね。納得しました。で、異常は？」  
イレギュラー

「ああ、その説明はウチがするわ！」

「行くで。まず…それは『白川 美加』」  
しらかわ みか

「！女性ですか」

「せやで。で並中に通う。中二」

「2・A？」

「…そうや。えっと…ボンゴレ内部破壊中…」

「！…!…どういふ事ですか」

「俗に言う『いじめ』だ」

「…被害者と加害者は？」

「沢田君と山本君が加害者…と言っても騙されて

獄寺君と六道君とクロームちゃんが被害者やけ…ど…!…?」

「!…?」

突如の圧迫感に耐えられずディオと摘花は黙り込む。

その圧迫感は…波音から発されていた。

「それ…本当？」

口を開くと倒れる、そう判断したのかディオは頷いた。

「そう…ならソイツ許さねえ。いや、許せねえ」

波音の口調が変わっている。怒ってる合図だ。

ディオはやつとの事でその状況に慣れてきた。

摘花はすでに座り込んでいる。…微かに震えながら。

「そこでだ。お前に「分かってる」！」

結構高等のディオですら意識を保つのが精一杯のオーラ…いや、

殺気を出して彼女は言い放った。

「大丈夫。ソイツ…壊してやるよ」

少しの沈黙の後、殺気と圧迫感が消えた。

そして初めの口調で波音は

「すみません。少し切れて理性吹っ飛んじやいましたね」

と言った。

「あ……」

ディオより下の摘花は絶えられなかったようで話せるまで少し時間がかかった。

と言っても十分で済むのだからそこはさすがに神だと思う。

普通の人なら壊れるところだ。

「……では、行って来い」

ディオは一つの扉を指差した。黒い空間に白……いや、

灰色の扉。

「行ってきます」

そして波音が扉を開けた……。

3・異常…ですか。(後書き)

最後こわいつ！

最初の方意味不だし…

敵の設定です。…チッ（前書き）

今回は敵のキャラのプロフ。

敵の設定です。…チッ

敵って程でもないWW

名前：白川 美加  
しらかわ みか

年齢：ツナと同じ。

誕生日：4月19日

星座：牡牛座

血液型：AB型

身長：143.2?

体重：40.2?

出身国：日本

利き腕：右

好きな事：自分のコマ

嫌いな事：自分の思い通りに行かない事

趣味：人を操る事（つか被害妄想？WWでいじめをする事）

スキル：マインドコントロール…と言い張っている。

好きな色：ピンク 赤

瞳：黒

髪：ピンク（染めた。）ロングでウェーブ。

一人称：ワタシ怒るとアタシ

容姿：…絵が出せたら出します。スミマセン

性格：典型的なぶりっ子。ウザイww

武器：星 二丁の銃、雨 短剣

属性：星<sup>ウツ</sup>ホントは雨。

一言：…「コマはコマ通りに動いてねvv」

敵の設定です。…チツ（後書き）

こんなもんかな。

4・家、そして学校と + (前書き)

久しぶりに出す…

#### 4・家、そして学校と+

扉を開くとそこには

「あれ？」

…ぼくの家のリビングがありました。

試しに部屋に行くとやっぱり

「ぼくの部屋だ。この白黒モノクロレイアウトは

他の部屋も前と同じだった。

違う点は…漫画が無かったくらい。

「あれ？…封筒。しかもぼく宛…？」

中はこう書いていた。

『デイトだ。』

この家は前…つまり転生前と同じにしてある。

サービスとでも思っておいてくれ。

…漫画はさすがに上から許可が降りなかった。スマン。

あと、属性の事なんだが

月+全部にしておいた。

…が月以外は言わないほうがいいと思う。

携帯は内容がゼロの状態だ。

一つだけある電話番号は俺に繋がる。

何かあればかけて来い。

他は大体説明どおりだ。

…神として、全力でサポートさせてもらう。

なにせこんな事初めてなんだ。

ああ、学校の手続きはしていないから

早いうちにしておくといいぞ。

何かあればまた連絡する。』

何かって何。

これが第一の感想。

「とりあえず午前九時に手続きしに行くとして」

現在七時。あ、午前。

「二時間…異常と過負荷を試しときましよう」

く飛ばして九時く

「そろそろ行きますか」

さつきはやばかった。

スカーレット  
致死武器で

家壊すところだった。

「着いた。！…着きました、ね」

並中に。

…さて、中に入ったら自動的にあの人がきますよね。

でも正門入らないと…

「…行きましようか」

あの人に来ないのを願って。

ヒョイッ

という擬音がつきそつな飛び越え方…

でしたね。ぼく。

さあ、行く」「何してるの?」「…この声は。

?」「並中生じゃ無いよね。…咬み殺す!」

みつかったあ!

4・家、そして学校と+ (後書き)

やっとリボキャラ登場!?

最初のキャラはこの人にしたかった。

5 ・手続きしに来ただけなのに(前書き)

今回少し(?)

雲雀さん寄りです。

## 5・手続きしに来ただけなのに

「話を聞いてください！」

？「うるさいよ」

うわぁ…

この会話で分かった人はいるでしょうか。

ハイ。手続きをしにきたぼくは

……委員長と鬼ごっこしてます。

モチロン風紀委員長と。

雲雀さん強いなあ。壁が壊れていますよ。

あ、大嘘憑き《オールフィクション》で直してます。

「ぼくは…ってうわっ！！」

パシッ！

「ワオ。あれを止めるんだ」

「ぼくは…手続きを…した…」

「！そっ。じゃあ応接室にきなよ…ってちょっと…」

ドサッ

あれ？なんでぼく倒れて…あ。意識が…

「…ハア」

突然の浮遊感に波音は意識を手放した。

雲雀は波音を抱え応接室に向かった。

「軽い…何、この子ちゃんと食べてんの？」

「ん…？」

見慣れない天井。でも…知ってる。

此処は…

「応接室…」

「あ、起きたね。じゃあこれ、書きなよ。」

渡された紙は二枚。

「転校するための紙と…！？」

もう一枚。それは

「なんですか！これ」

「風紀委員申込書」

「いや、入りませんよ?!」

「君に拒否権は無いよ」

いや、あるから!とはつつこめなかった。

どす黒いオーラが見えたから。

「入るよね？（黒笑）」

「…ハイ」

と言う訳で両方書き終わりましたので

「多分こんな感じですよ」

と渡した。此処で

一つの疑問が浮かぶ。

黒曜編って終わってるのかな？

「一つ聞いていいですか？」

「…何」

オブジェクトが見当たらないので

「パイナップルって好k i「嫌い」…」

黒曜編は終わってるみたいですね。

「風紀委員のことは言わなくていいから」

「ありがとうございます」

「別に。もう帰って良いよ」

「あ、はい」

「…またね」

「！！ハイッ！また明日！（ニッコッ）」

「！／／／／／」

波音が帰った後雲雀は呟いた。

「反則だよ…／／／／」

## 5 手続きしに來ただけなのに（後書き）

さて、問題がひとつふたあつ程。

1、リング争奪戦やる？完全オリジナル？

2、誰落ちにしようか…ふふふふふ。

誰か何か意見無いですかね…。

6 ・委員長、恭弥との朝（前書き）

投稿おくれてすみません

## 6 ・委員長、恭弥との朝

その日はあの後何も無く眠った。

ので、次の日。

「早く起きすぎましたね……」

現在…午前4：30。

「ひば…委員長は居てるでしょうっし  
学校に行きましょう。」

と、いうわけで学校。

「応接室はこつちですよね」

テコテコ…ピタ。

「スウーハアー…よし」

突入！

「失礼します」

雲「？ああ、昨日の君か「波音」？」

「汐海でもいいから名前で呼んで下さい」

雲「…波音、書類の手伝い。そっちの紙ね」

「!…ハイッ(ニコッ)」

雲「…/ /」

「なんか顔赤くないですか？委員長」

雲「…名前」

「へ？」

雲「僕が波音って呼んでるんだから君も恭弥ね」

「え…ひばりんじゃ駄目ですk「何それ。絶対やめて」

「じゃあ…ひばきよーとか」

雲「やだよ。僕そんな名前じゃないし」

「分かりました。恭弥ですね」

雲「ん。じゃあ書類ね」

「はい…って多くないですか!？」

雲「…うるさいよ」

↳2時間後

「お…終わった…？」

雲「うん、できてるね」

「やっと終わった。っ！…終わりました」

雲「敬語外せば？」

「…クセ、と言つか直らないので無視して下さい」

雲「分かった。…けど」

「けど？」

雲「直るように努力してね」

「分かり…分かった」

雲「ん」

ひば…恭弥はポンと手をぼくの頭に置いた。

そして頭を撫でた。…こんな久しぶりだ…。

雲「…どうかしたの？」

「へ、どうして…？」

雲「笑ってたから」

ぼくが笑ってた…？

「え、本当ですか？」

雲「…うん」

うわぁ、恥ずかしい…

「／／／／／」

雲「（…可愛い…）クスッ」

「わ、笑わないで下さいよ！／／／」

やっぱりこの人…

性格悪い！マンガのときもでしただけ、

本物はもっと！

雲「なんか嫌味言ってる」「言ってますん…」

「そろそろHRの時間なので行きますね」

雲「ああ、そうだね…」

雲「何かあったら僕に言いなよ」

「…」

正直いじめの方には首を突っ込んで欲しくなかったんですが。

「分かりました。そうします」

雲「そう。じゃあね」

「はい。また」

波音は職員室に向かった。

「まずはいじめを止めないと…」

そう感じながら。

6・委員長、恭弥との朝（後書き）

雲雀さんとツナに一票はいりました！

指輪戦はやるに一票入りました！

黒蝶と渚サンありがとうございました！

あ、オチはボンゴレとヴァリアーからです。

7・香水の匂いと嘘くささ。(前書き)

更新遅れてすみません…

## 7・香水の匂いと嘘くさね。

先「入って来い」

「失礼します」

ガラガラ

「!？」

香水のキツイ香り…気持ち悪い。

「じゃあ、自己紹介しろ」

何かと上から目線の先生が言う。

「汐海 波音です。家の事情で転校しました。

好きな物は歌と仲間。嫌いな物は…いじめです。

これからよろしくお願いします^^」

「「「「「よろしくー!」「「「「「

「「「「「よろしくな!」「「「「「

…とてもいじめの場所には見えないですね。

それが余計に悲しいのですが。

さて。あいつ…じゃないあれは…居た

「よろしくねえ汐海さんVV」

ぐ…吐くな！我慢だぼく！

「汐海の席は一番後ろ窓際の席だ」

「分かりました」

獄寺の隣か…楽ですね…

「宜しく願いしますね」

「…」

無言の獄寺

…相当なんですかね。

早く何とかしないと…。

く休み時間く

「どこから来たの？」

「…秘密です^^」

「なあこっち来いよ」

「どうしてですか？」

…これでしょうか。

「ソイツの隣とかホント可哀想」

「…何かあったんですか？」

「そいつは美加ちゃんを虐めたんだ！」

主人公だった沢田が言う。

獄寺は…

「…」

相変わらず無言。

「早くこっちに来るのな」

一緒に居てるハズの山本も波音に言いかける。

「あんまり意味が分からないんですけど」

当の本人…ひがいしや加害者は話した。

「獄寺君があ、『お前なんか』ってえ…グスッ」

見せてきたのは切り傷

「…へえ」

刃の向きどう見ても反対だし…。

「汐海さんも味方になってくれるよね？」

沢田…どこまで自惚れてる。

「そうですね。ぼくはこちら側です」

「……………!?!?」「……………」

手を差し伸べたのは…隼人の方。

クラス全員が目を見開く。

「なんでなのな。ソイツは…」「その傷」?

「どうみても刃の向き反対ですよね」

「……」

白川は明らかに動揺している。

「自分で切らない限りはそうはなりません。」

「…そう。君はそっち側なんだ」

沢田は冷たく言い放った。

「ど、どどどしてえー?」「敵として」「!?!」

「敵として…宜しくね?」

「これで…ターゲットはぼくになったはず…。」

7・香水の匂いと嘘くささ。(後書き)

指輪戦はやるが4票

落ちは雲雀が3綱、骸が1です！

引き続き宜しくお願いします！

## 8・ファミリー結成(前書き)

少し訂正しました。

感想をくれた方々(なんとなく名前はふせますww)

ありがとうございました!!

## 8・ファミリ―結成

「…なあ」

誰も…否、二人以外居ない放課後の教室。

一人の男子は女子に問いかける。

「なんでしょうか」

平穩を装ってる女子は内心

(初めてしゃべった!!)

とまあ考えていたのだが。

「どうして。どうして俺をえらんだ?」

そんな考えは一気に吹き飛ぶ。

「何故か。…ですか」

読者の皆様には分かってるだろう。

女子は波音、男子は獄寺だ。

波音は少し考えてから言った。

「ぼくはいじめが嫌いなんです」

「答えになってねえ。どう見たって俺が…っ」

そこで止まったのは『自分はやってない』から。

「いや、どうみてもあっちが加害者ですよ。」

普通一度いじめられた相手を見たら震え上がります

それにいじめられた人はなかなか言い出せないものです」

…『』にいじめられた、なんて。

それを言わなかったのは…何故か？

それは彼女しか分からない。

「じゃあ、信じてくれるんだ…な？」

「モチロンですよ。信じてください」

獄寺は少しだけ出していた殺気を消す。

…心を開いた合図だと思う。

「…では、冷静に聞いて下さい」

フツと緊張感が教室に充満する。

「何だ？」

「君の信頼していた十代目さわだつなよしはいないと思って下さい。」

「!?!?なんで十代目を知ってる!?!」

ああ、だから冷静にって言ったのに。

「そちら側の人間なんですよ。ぼくだって」

「…そうか。それよりいないって?」

「彼は白川あれに操られている…とても」

「そういう事が…」

「だから優しい言葉を掛けられても一度ぼくを通して下さいね」

「分かった。…じゃあ、さ」

「?はい」

「今は…お前が俺のボスになってくれ」

「!?!?」

まさか、こんな事を言われるとは…でも

人が頼ってくれるのは…悪くないかもしれない。

「…いいですよ。でも二つ」

「？」

「一つは波音と隼人、と呼ぶこと。二つ目は…」

「…裏切らないで。絶対に」

「…!! ああ、約束するぜ」

「では、ファミリーの名前は…」

「…」「」

沈黙の中、第三者の声が聞こえた。

「君達何やってるの…って波音？」

そう、見回りに来た恭弥だ。

「恭弥!! いい所に来ましたね!!」

「呼び捨てっっ!？」

「…いやな予感しかしないんだけど」

「まあ、そう言わずに。ね？」

強引に、というかほぼ強制的に

波音は話を聞かせる。

「へえ…面白そうだね。僕もそれに入れてよ」

それ〓ファミリィだ。

隼人と波音は

「モチロン!!」

と答えた。

「でも、珍しいですね、恭弥が誰かの下につくなんて」

「…特別だよ」

「そうか…(汗)」

「じゃあ後は…」

「名前…」

少しの沈黙が流れる。

「じゃあ…」

口を開いたのは恭弥。

「ネ口」

「ネ口?」

「そう。イタリア語で」

波音がいち早く反応する。

「！黒…ですか。いいですね」

「僕達にピッタリじゃない？」

あちらからすれば。…と言い加える恭弥。

「いいんじゃないか？」

「ええ。それで行きましょう！では人数も集めないと…」

誰を誘う、なんて当の昔に決まってるのだが。

「考えておきます。今日はこれで…」

下校時間どころか辺りは暗くなっている。

「ああ、そろそろ帰らねえとな。親も心配するし」

あ。と波音が声を漏らす。

「それは大丈夫です。親はとっくに他界しました」

「「！」「」」

悪い、と隼人がいう前に波音が止める。

「謝らないで下さい。少し罰当たりですけど…」

『二人が消えてくれて心の底から嬉しいんです』

真っ暗な光のない瞳。…それに笑み。

「ゾクッ」「

二人はその波音を見た時に感付いた。

波音の過去の壮絶さに。

奥深くの悲しみ、怒り、憂いに。

だからこそ…聞かなかった。

「…そうか。じゃあ、帰るか」

「…ええ、そうですね」

「風紀が乱れることしないでね」

「わかってますよ」

「…また明日」「」

三人は学校の外に足を踏み入れた。

外には真っ暗な中に月が光っていた。

まるで未来を現わすかの様に…

## 8・ファミリー結成（後書き）

19日までに後一つ、

19日に一つは絶対に書きます！

なぜかは…19日には分かります

アンケート

リング戦 やるに

落ち 雲雀3、綱と隼人1、意外に骸2 W W

まだまだ分かりませんね W W

9・転校早々休みます(前書き)

19日になってしまった!!

急げ!!

## 9・転校早々休みます

家に帰った波音は考えていた。

…ファミリーのメンツの事だ。

「二人には悪いですが骸は必要ですよね」

幻覚は使えた方が楽だ。それに、骸はいじめられている方。

仲間には十中八九入ってくれるだろう。それは初めから決まっっている。

それとは別の話だ

「ヴァリアー戦は多分まだ」

始まってない。つまりは今なら仲間にも出来るといふ事だ。

波音と白川<sup>あれ</sup>が居る。

それに今、ボンゴレ側には『嵐、雲、霧』が居ない。

そう考えると原作通りにはいかないのだ。

百パーセント。

これが、今波音が頭を抱えている悩み。

「どつするのが正解何でしょうか」

彼女の思考回路は少し変わっている

正解を求めるなんて可笑しいのだが。

「とりあえず……」

明日は骸を誘いに行こう。できたら……二人も連れて。

そのために必要な事がある。波音は眠りについた。

AM 1:30

スパアアアン!

「いつてえな、久々の再会だぞ?」

真っ黒な空間に2つの人影。そして鳴り響く平手の音。

「貴方に頼みがあります、ディオ」

「……そう言うのはアイツに言ってくれ」

「え? アイて呼んだ?」ああ、摘花」

「設定変更とかはアタシに任せてや!」

「では、早速本題に…」

本題は二つあります。

そして三人は話し合ったり色々していた。

AM 6 : 4 5

「あまり寝た感じがしませんね」

寝てる間も話してたのだから当たり前だ

「早々に学校を休むとは…」

今日はスカウトに行くので学校を休む。

2人を呼ぶかは分からないが

「あの2人の事ですから会つと…」

戦いそうですね。口にはあえて出さなかった。

「隼人に聞いてみましょう」

一緒に来るのかどうか。…くると言いそうですが。

「行くに決まってるんだろ」

「やっぱりですか。学校は？」

「お前と同じで休む」

「分かりました。後は…恭弥、か」

「一番の難関ですよね…」

「なあ、誰をスカウトするんだ？」

「行けば分かります」

「…分かった」

「では、恭弥を説得しに行きましょう」

「だな」

「行くよ。僕も」

「へえ、説得には時間がかかると思ってたんですが」

「君がスカウトするんだ、強いんでしょ？」

「…貴方も隼人も会って事ありますよ」

…ただ

「敵として、だし相性は最悪ですが」

だって、骸ですもん。

「…もしかして…」

「あれ、恭弥分かったんですか？」

「咬み殺そ」「止めて下さい。味方にするんです」「…チッ」

「メリットもあるはずですよ、とりあえずは…」

牢獄から出すのが第一条件だ。

（黒曜ヘルシーランド）

「…おい、波音まさか…」

「はい、骸です。スカウトするのは」

スタスタと歩く波音と恭弥の後ろを

隼人は呆然としながら追った。

ちょうど中に入ろうとした時だ。

？「お前ら！！何しに来たんだびよん！！」

？「…めんどい」

聞いた事ある声が聞こえた。

「城島 犬と柿本 千種ですね？」

クローム髑髏、もとい六道 骸に会いにきました。

骸から聞いているハズですが？」

「！！じゃあ、汐海 波音は…」

「ぼくの事です」

「…めんどいけど入って」

「隼人と恭弥もいいですよね？」

「しょうがないびよん！！」

「ありがとうございます。では行きましょぅ…？どぅしました？」

恭弥と隼人は啞然としながら歩き出した。

「ごごだびょん」

？「…あなたが…汐海さん…？」

「はい。骸から話は…」

「聞ってる…えつと…？」

後ろの二人に説明する。

アナグラムのクロームの事

骸が復讐者ヴァインデチエの牢獄にいる事。

「…（ムスツ）」

若干恭弥が拗ねているのは

実体…つまり骸本人と戦えないからだろう。

「そんな恭弥に嬉しいニュースです」

「「？」「」

恭弥と隼人が不思議そうな顔をした。

「とりあえず骸と変わってくれますか？」

「…分かった。…」

サアアアア

霧がはれると其処には骸が居た。

「約束は本当なんでしょうね、波音」

「モチロンです。ぼくは嘘をつくのは嫌いですよ」

「クフフ、そうですか」

「六道 骸…」

「おや、雲雀 恭弥と獄寺 隼人」

「ファミリーですからね」

「波音、今から何するんだよ」

今までしゃべらず黙って聞いてた隼人が言った。

「へ？ああ、そうでしたね、見てて下さい」

波音が目を瞑り何かを言う。

「カトダ、メダガ、レコカ、トダ、メダガレア、」

呪文のようなもの。

「我々ニナンノヨウダ…！！ナミネサマデシタカ」

「「「「「！？」「「「「」

波音、ヴァインデチェ復讐者以外が驚く。

波音様という言葉に。

そしてこの次の言葉に。

「あのさ、早速だけど骸、犬、千種を釈放して欲しいんです」

「カシコマリマシタ。デモ…」

「その三人分以上の牢獄に入れなきゃならない人物リスト整理してきましたから」

「…ワカリマシタ。ロクドウムクロノカラダヲモツテキマス」

「ありがとうございます」

「「「「「…（呆）「「「「」

「…！…皆さんどうお感じでしたか？」

「説明して。波音」

「あ。ぼくの部下…なのかな？って言う人が復讐者ウエンデチエのボスなんです  
これは、ディオのことだ。

「これはこれは…じゃあ、いじめの首謀者も…」

「それはいやなんですよ」

「どうしてだ？よっぽど簡単じゃ…！？」

突然の威圧感に襲われる。

波音だ。

「みんなをここまで追い詰めたんだ…」。

俺が殺らなきゃ気がすまねんだ」

そんな中骸の身体が届いた。

「マタナニカアレバオヨビクダサイ」

「え？あ、はい。ありがとうございます」

…先ほどの空気が嘘のように

波音は淡々と言った。

「では、骸、身体に戻ってください」

「…ええ。わかりました」

その途端、骸はクロームになり骸の身体が起き上がる。

クロームは今までのトコロを見てないので

周りの人が固まっているのが気になったらしい。

「…？」

「クロームさん。ぼくの事は波音で良いですからね」

「あ…「敬語も」…分かった。波音」

「^^では、えーとクローム髑髏もとい風

六道 骸、城島 犬、柿本 千種。

今から正式にネロファミリーの一人です。

これから、よろしく^^」

「…よろしく。」

「よろしくだびょん！」

「宜しく願います」

「…よろしくね…波音」

こうして、黒曜チームはネロファミリーに入った。

9・転校早々休みます（後書き）

とりあえず今日中にもう一つ出します

10を特別編にしたいくてここまで頑張ったんだ！！

呪文をひっくり返して読むと、ある曲の歌詞になります

10・特別編！9月19日（前書き）

よし！間に合ったぜ！！

キャラ崩壊&恭弥寄りです。かなり

10・特別編！9月19日

「ん〜…？7時…学校は休みですね」

9月19日といえば敬老の日。

…それだけでは無いのだが波音は忘れきっている。

「今日はヒマなんですよね」

だから…

「商店街でも行きましょうか」

波音は何も考えず商店街に出かけた。

同時刻、恭弥宅。

「…なんで僕の家で…しかも群れてるし」

「しょうがねえだろ！ここが一番家でかいんだ！」

「黒曜でやる訳にもいかないでしょう」

「…飾り…」

「ああ、それは窓の上をお願いします」

「はい…骸様…」

ネロファミリーの全員が恭弥の家に集まっていたりする。

「料理は獄寺 隼人とクローム髑髏ね」

「何故、君が指示をしてるのですか？」

「僕の家だから」

「……」

「骸様…これは…？」

「ああ、それはあつちです」

着々と準備を進めていた。

波音は家に戻っていた。

「ヴァリアー……どうしましょう……」

いっそあの人たち……ファミリーの皆に

言っちゃいましょうか……

いやでもそれは……

「……………いい案が出ない……」

いやまてよ、月と星……といってもうそだけどなら

どっちかがヴァリアーに行つて…とか？

「やっぱり今度会いに行きましょうっ…」

単独で。

…未来のことを考えていた。

P M 6 : 3 0 。

ピンポーン

「…誰ですか…って恭弥じゃないですか」

「うん。波音今から空いてる？」

「？ハイ。空いてますよ」

「じゃあ、ちょっと来て」

「分かりました」

〜恭弥宅〜

「…恭弥の家じゃないですか」

「そう。入って」

「…？ハア」

ガチャ

「お邪魔します」

「…こつち」

リビングに連れて行く恭弥。

「開けて」

「？」

キィ…とドアを開けた時。

パン！パン！

「！？」

「「「「「お誕生日おめでとう！波音！」「」「」「」

「…（ポカーン）」

クラッカーと共に皆の声。

「あ…今日って9月19日…」

「忘れてたのかよ…！」

「すっかり」

「…とりあえず座ってください。今日の主役は貴方なんですよ」

「え、あ、ハイ」

「じゃあ始めるびょん！」

波音達はご飯を食べたり遊んだりしていた。

「隼人とクロームご飯おいしいですよ^^」

「…チツ」

「…有難う…」

「^^」

そろそろ終わろうとしていた頃。

「…波音…」

「…!!クローム!!」

「これ…」

クロームが差し出したのは駅前のファンシーショップの紙袋。

中の物は…白い星がついた黒いブレスレット。

「…！…有難うございます」

「…お揃い…」

クロームは黒い星のついた白いブレスレットをしていた

「…^^^友達の証ですね」

「…！…うん^^^」

「波音！！俺らからだびょん！」

「…これ。」

犬と千種からは黒い蝶のピアス。

「お、俺は…これだ」

隼人からは銀の十字架が付いたネックレス。

「僕からはこれです^^^」

骸はサファイアが付いたピンクリーリング。

「皆さん…本当にありがとうございました」

波音は深く頭を下げた。

誕生日に祝ってもらったという習慣が…いや

覚えが無い波音にはすごく嬉しかったのだろう。

…この後、皆は帰っていった。

家に居るのは恭弥と波音。

…さて、気付いただろうか。

恭弥だけ何もあげてない事に。

「波音」

「はい、なんでしょう？」

「プレゼント、欲しい？」

「…いらないうと言つと嘘になります」

「そっ。じゃあ…」

その後、微かなリップ音。

…え、リップ音？

「／／／／／！？！？！？！？！？！？／／／／」

「驚きすぎ」

「へっ？っあ…」

「…（可愛い）」

「えっと…ありがとうございますっ！？」

「…（クスツ。はい。これ」

手に渡されたのは…鍵。

「…鍵？」

「そう。僕の家だね」

「出入り自由ということですか」

「そうだね。…波音」

…誕生日おめでとう」

「…！ありがとうございますっ！…！^^」

こうして、波音の誕生日は終わった。

ああ、家に帰ると。

「…わあ」

いつ着るか分からない黒のドレスと黒のハイヒール。

白い髪留めもセットだ。

そして「誕生日おめでとう！」と書かれた

紙が貼ってあった。

「…ありがとうございます」

波音は夜空に向かってお辞儀をした。

10・特別編！9月19日（後書き）

大胆っすね。恭弥。

伏線多いなあ…

ピンクี้リングは小指につける指輪です。

サファイアは9月の誕生石なので^^

11 ヴァリアーにて衝撃の事実(前書き)

最近PCの調子がいい。

## 11 ヴァリアーにて衝撃の事実

「間もなく目的地に到着します。シートベルトをお閉め下さい」

飛行機のアナウンスが鳴り響く。

え…飛行機！？と思った人、正常です。

「やっと着きましたね」

はい、ぼくはイタリアに来ました。

理由？もちろんヴァリアーに会いに来たんです。

いやあ、色々知りたいのでね…。

白川 イレキ 美加 ユラーの事とか

有れば嬉しいですし、何よりもリング戦。

星…（仮）と月。戦うとしたらこの組み合わせ以外に無いだろう。

隼人を嵐に出来るかどうかも不安ですけど…。

とか思ってるうちにヴァリアーに着いてしまった。

「さて、と」

門番に話しかける

「汐海 波音と言います。ザンザス様並びに幹部の方々に話があり此処に来ました。

開けてもらえますか？」

「汐海 波音…？さて、幹部の誰かに連絡を取る」

「お願いします」

10分くらい経ってから門番が此方に言った。

「入り口で待っている。じきに幹部の誰かが来る」

「わかりました」

言われたとおりに入り口で待つこと5分。

? 「ししっ お前? 用事があるって云う奴」

「あ、はい。汐海 波音と言います」

「オレはベルフェゴール。ベルでいいぜ」

「分かりました。ベルですね」

「ん。じゃあ行くぜ。全員集まってるから」

「はい、行きましようか」

「ああ」

ギィィ、とドアを開けると幹部とボスはもう集まっていた。

? 「ヴオオオイ! おまえかあ!」

「…うるさっ(ボソッ」

? 「ムム、君が汐海 波音かい?」

「はい。名前は皆さん知ってるみたいですね」

？「あらあ〜ん、カワイイ子じゃないVV私的なm」「あ」「？」

「大丈夫です。ぼくも皆さんの名前くらい分かりますよ」

「…オイ、カス。用はなんだ」

「ああ、そうですね。えと…とりあえず…」

ぼくは、一応ボンゴレ沢田 綱吉側のクラスメイトです」

「「「「「「！」「」「」「」

「あ、でも戦いに来たわけじゃなくて…」。

ぼくをヴァリアーに入れてください」

「「「「「「！？」「」「」「」

波音が一方的に話を続ける。

「今、こっちのボンゴレは壊滅的なんです。

嘘吐き女が星の属性とか言い出しましてとりあえず戦える状況じゃないんですよ。

で、その自称星女がいじめというまたくだらないことをしてましてね？

嵐、雲、霧が居ない。…あ、嵐、雲、霧はぼくの仲間なんですけどね

で、その自称星女を倒すにはぼくがこちら側に行こうかと思いついて。

ぼく的にも都合が良いですしね」

…噛まずにサラツといった波音はすごいと思う。

「ムム、自称星女とは『白川 美加』のことかい？」

「！！知ってるんですか！？」

「知ってるも何も…」

「ソイツなら少し前までヴァリアーに居たぜ。…逃げたけどな」

予想外の展開に波音も一呼吸遅れる。

「…言えるところまで。…聞かせてもらえます？」

ヴァリアーの顔が少し翳ったのを波音は感じ取り『言えるところまで』と言った。

全貌を話したのは、意外にもザンザスだった。

「…二年ぐらい前の話だ。カスが入れて欲しいと此処にきたのは…  
…小学6年生と云った頃か。」

「珍しい星の属性を持っている、と言った。実際にある訳ではない  
架空の属性だ。」

ただ、属性のことをやけに詳しく話す。だから…

本当に有ると信じた振りをして仮に幹部として入れた。…弱くは  
無かったからな。

つい最近だ。アイツが急に言い出した。それは…

『ベルにナイフで殺されかけた』だ」

「……！」

「ヴァリアーをなめてたんだろ。引つかかると思ってたらしいが  
そんなものに引つかかる程弱くないからな、

返り討ちにしてヴァリアーを抜けさせた」

「…へえ。ありがとうございます」

その場が一瞬にして凍りつく。…ザンザスさえも。

キレた波音の殺気に。

「やっぱりアイツは壊さねえと…」

壊す。それはすなわち消すという事。

「じゃあ、明日も学校あるので帰りますね。

ヴァリアーに入る件、考えておいて下さい」

固まったヴァリアーを放っておいて、波音は城から出て行った。

「…」

今日の晩御飯を考えながら。

## 11 ヴァリアーにて衝撃の事実（後書き）

体育祭も文化祭も吹奏楽部のオレにとっては

じごくなんだよぉー！！

体育祭にいたってはスウェーデンリレーのアンカー。

足速くないよ！？400mで…殺す気が！！（泣）

12・え？何で此処に…？（前書き）

ちよつと変えました

12・え？何で此処に…？

日本に帰ってきたのは日が変わった頃。

「さむっ…へっくしゅ」

とまあ、くしゃみしてるのが我らの主人公波音。

「眠い…寒い…早く帰りたい…」

小走りに家に向かってたのもつかの間、今では歩いている。

「うああ…ただいま…」

なんとなくにただいまと言ってみる。

…誰もいな「」「」「おかえり」「」「…

「へ？」

「帰るの遅かったね。日付変わってるよ」

「…身体…冷えてる…冷たい」

「おまえなあ…風邪ひくぞ…？」

「イタリアまで行くのにこの格好ですか…」（呆）

上から恭弥、クローム、隼人、骸だ。

「え…え〜つと、とりあえず…どっから突っ込みましょう…」

「家に居るのは僕のスペアキーで開けた」

「ボスが休んでファミリーが集まるのは当然だ」

「私達が居るのは…学校休んだって聞いて…」

「イタリアに居たのを知ってるのは空港で見かけたからです」

「…説明有難うございます」

恭弥がスペアキーを持っていることにはあえて突っ込まない。

骸が空港に居るのにも当然突っ込まない。

ハア、と溜め息を吐く。

「貴方達はぼくを驚かせるのが好きなんですか？」

誕生日といい…（前回参照）今回といい…

「うん」「…少し」「ああ」「ええ」

恭弥、クローム、隼人、骸。

「皆…ある意味正直で偉いですけど」

そこは否定しろよ。と、思った波音。

「…波音顔赤くないですか？」

「え？そんなこと無いですよ…」

ペタつと額に恭弥の手が当たる。

「…熱い。熱あるよ」

「そんな格好でイタリアなんか行くからです」

格好はノースリーブのTシャツに半袖の薄いのを羽織った感じ。

下は短パンにスニーカー。

…風邪も引くだろうよ。そりゃ。

「部屋で寝とけ。えっと…上か？」

頷く波音に隼人は「行くぞ」と言って二人で上がっていった。

（10分後）

降りてきたのは隼人。

「寝たぜ、アイツ」

「じゃあ、帰ろうか」

「そうですね。夜遅いですし」

「…骸様…行こう」

「そうですね。クローム」

「じゃあな」

こうして4人は帰っていった。

次の日の朝。波音はゆっくりと起き上がった。

「ん…あれ？頭痛い…」

…見事な風邪引きちゃんです。はい。

「…嫌な夢を見ましたね…」

汗をかいているのがそのせいだと分かる。

ソイツがいるからアイツが死んだんだよ

アンタさえ居なけりゃワタシは、ワタシは…!!

キミなんて居なくなればいい

死ねばいいよ、オマエ

どうしてあの人はいないのにアナタがいるの？

「っ 黙れ…だまれえ!!」

大声を出したことに自分自身が驚く。

「っ アイツらは…忘れてしまえばいい…」

なのに、どうして…

「何も思っていない…感情移入する必要も無い…」

なのに、なのに…

「なんで、涙が出るんだよ…!!」

『たとえば、誰かが傷ついていても…時間は止まらない』

当たり前前のように誰もが知ってそうで…知らない。

平等に動く針が…時に残酷なことを…。

そして、それが受け入れ難いことを…

12. え？何で此処に…？（後書き）

つぶつぶ！もつ壊れちゃえ

### 13・久しぶりの学校（前書き）

キャラ崩壊とか色々ヤバイ。

アンケートの結果、雲雀落ちのリング戦あります！

### 13・久しぶりの学校

サブタイトル通り学校に行きました。

朝、あんな事があつたせいで不機嫌な波音。

久しぶりに学校に顔を出す。

「目一杯楽しもう」

いじめを楽しみにしながら…？

〈学校〉

靴箱に靴が…ある。

「いや、普通だろ」と思つた方、…正常です。

「あれ…靴が普通にある。靴箱も壊れてないし…？」

ぼくがいじめの対象になつてないのか？

などと呟く。

少しネタバラシだがもう気づいてるだろう。

彼女は前世、いじめを受けていた。だからまあ、

新しい上靴を持ってきてたりと用意周到だ。

…必要なかつたけど。

廊下にも何も無く、そのまま教室についてしまった。

「…水、かな？」

バケツを持つ影が見える。

敬語が外れているのは不機嫌だからだ。

ガラツつとドアを開ける。が、

バケツが見えた瞬間閉める。

バシヤア！！

「うわぁ！！」

という悲鳴は波音のはずだったが

波音がドアを閉めたためにかけた方にかかった。

「つてめえ！」

びしょぬれの男子生徒が波音に駆け寄る。

そして…

ビシヤア！「！！！」

ペットボトルの水をかける。

二重構造だったとはさすがに思わなかったので当然波音にかかる。

「…冷たいです。何してるんですか」

「お前、美加ちゃんに手えあげたんだってな！」

「女の子に暴力なんて最低」

じゃあ、波音は女の子じゃないのか。

というツツコミは普通にスルーされるだろう。

そういうもんだ。(作者体験談)

「汐海さん、もう一度だけチャンスをあげるよ。」

スレツナになってきたなあ…

「美加ちゃんの仲間」なりません。というより、仲間って多数対少数認めましたね「…」

「それにしても…」

波音の声が変に高い。キーじゃなくしゃべり方が。

「こんなもんですか。いじめって」

「……………!?!?」「……………」

クラス全員が驚くのも無理は無い。

波音の言葉の選び方がおかしい。

「もっとこう、暴力とか卵とかが来ると思ってたんですが

水だけでしたし？二重構造はいいと思いますよ

結構びっくりしました。…さてと、濡れてしまったし

制服貰って帰りましようかね…」

最近長つたらくしゃべる様になった波音は

言いたいことを全部言って啞然としてる生徒を置いて

応接室に向かっていた。

余談だが、生徒達はこの後10分は動かなかつたらしい。

この中には隼人も入ってるらしい。

（応接室）

「失礼します」

「波音…ってどうしたの」

「いや、ちょっと水をかけられて」

「…咬み殺「止めて下さい。グルだっではれるじゃないですか」…  
（ムスツ）」

「そんなあからさまにムスツとしないで下さいよ」

「…これ、制服」

「ああ、ありがとうございます」

「着替え終わったら言ってよね」

そう言って恭弥は応接室から出た。

「…とつとと着替えましよう」

（5分後）

「もういいですよ」

「ん」

恭弥が入ってくる。

「では、ぼくは帰りましようかね…？」

帰ろうとした波音の腕を恭弥がつかむ。

「書類整理。君、風紀委員でしょ」

「う…分かりました」

と、言うわけで波音は書類整理を手伝う羽目になった。

「また、多いですね…」

「しょうがないでしょ」

「まあ、そうですね」

何百枚という束を。

く2時間後く

「終わった…」

「帰ってもいいけど？」

「いえ、眠いので此処で寝ます。誰も入れないで下さいね」

「そう。分かったよ」

「あ、昼になったら起こしてください」

「はいはい」

「宜しく願います…スウ」

「さてと、僕は続きをしようかな」

恭弥は今日の分が早く終わったので明日の分も少しやり始めた。

…応接室は静かな部屋になる。

く昼休みく

「波音。お昼だから」

少し揺すってみるのだが、起きる気配は無い。

サラリと恭弥が波音の髪を撫でる。

波音を見つめる恭弥の瞳はいつしか

…愛する者を見る瞳に変わっている。

勿論、恭弥も波音も分からないのだが。

自分の気持ちに気づくのは後、どれほど先なのだろうか…

「…おきないし…」

ベチンッ

「痛いっ！」

頬をたたく。…普通なら出ない音だと思っ所を見ると相当の力だろう。

「なにするんですかっっ！」

少し涙目になりながら波音が訴える。

「おきないのが悪いんだよ」

「…すみませんでした」

勝てないと悟った波音は即座に負けを認めた。

「で、どうするの」

「ああ、帰ります。ありがとうございました」

「…そう。じゃあね」

「はい。また明日」

二人は別れた。

明日に重大な報告をしなければならぬ…なんて

知らないまま…

### 13・久しぶりの学校（後書き）

リング戦…ねえ。

ああ…どうしようかねえ…

アンケート投票してくれた皆様有難うございました！！

## 14 ヴァリアー正式入隊(前書き)

~~~~~

でも見てね。

## 14 ヴァリアー正式入隊

色々あつて帰ってきた波音に

夜、電話がかかって来た。

「…？はい」

携帯に出ると

「ヴオオオオイ！」

馬鹿でかい声が聞こえる。

「…相変わらず煩いですね、スクアール」

「うるせえ！お前のヴァリアー入隊が正式に決定したぞお」

「…！！本当ですか」

「嘘言つてどうするんだあ」

「…」

返事が無い電話にスクアールが呼びかける。

「？オイ、どうしたあ？」

「……」

波音の心情

「（ファミリーの敵になるのか……」

どう説明しましょう）」

「ヴオオオイ！」

「うわっ！？どうしたんです」

「話は終わりだあ！切るぞ！」

「あ、はい。分かりました。ありがとうございます……あ  
言ったところには既に切れていた。」

「……………さて、と」

明日には…説明しないとイケない。

自分の口から。

波音はネロファミリー全員にメールを送った。

.....

TO: 獄寺 隼人

雲雀 恭弥  
藤咲 凧  
六道 骸

S b : いきなりですみません

明日学校休んで朝8 : 30分頃に

ぼくの家に来てくれませんか？

重要な話が有るんです。

.....

一番早く返信が来たのは凧。

ちなみに凧の本名は仲間ということであいた。

.....

T o : 波音

S b : 分かった。

8時半だね。

…骸様と行くから。なるべく早く。

.....

…と、言うことは、骸からはメールが来ないだろう。

次に恭弥。

.....

To:波音

Sb:そう。

分かったよ。きみが言うんだから

相当重要なんだろうし。

.....

…もう何も言うまい。

最後の一行にツッコミなんて入れない。

「…後は隼人ですn」ピロリロリン「あ、きましたね」

.....

To:波音

S b : そつか

分かったぜ。波音のことだ、  
すげえ重要なんだろうしな

- - - - -

∴ 一部分ある人と似てるな。

そんなに波音が重要という話の重要さが高いのだろうか。

いや、確かに今回は高いで済む話では無い。

「どう説明しましょう…」

悩んでる内にいつの間にか波音は眠っていた。

「朝8時」

「ん〜眠い…よく寝た…けど」

低血圧な波音は少し寝ぼけている。

後30分で来るのを知ってるので

着替えたり色々していた。

とか、なんやかんやしてる内に全員集まったり

「ではでは、重要な話を始めます」

「何なの、早くして」

「これから、ちょっと敵になります」

「「「「え?」「「「」

「いや、『え?』じゃ無くて」

「どんな何に対しての敵ですか」

「…言っちゃっていいのかわかりませんがと言います」

リング戦をサラーツと説明する。

「で、そのヴァリアー側につくんだな？」

「そういつことになります」

「…頑張つて」

「へ？」

凧の答えに間抜けな声を出す。

「お前が決めた事なら俺達はとめねえよ」

「強い奴と戦えるなら構わないよ」

「何か意味があつて選んだんでしょう？なら別に」

「…私達は…波音の仲間…それだけでいい」

「…！…あ、りがとう、ございます」

「感謝される事誰も言つてないんだけど」

「いいんですよ。ぼくが言いたいだけです」

波音は軽く笑つてから

「話はこれだけです。ぼくは少し準備があるので…」

皆と別れてからボソリと呟いた。

「本と…ありがとう」

波音は準備に取り掛かった。

イタリアへ行くための。

#### 14 ヴァリアー正式入隊（後書き）

さてと、白川をどうするか

未だに考えてないんだよね

happy birthday 僕！

今日（と言っても後30分）は僕の誕生日！

明日でいいから誰か

おめでとうと言って下さい！

誕生日メールはリア友1人しか

貰って無いんです。

いや、明日になれば学校で友達がくれますけど

と言っわけで誰か祝って？

「ぼくの作者さん、おめでとうございます」

！！波音ちゃん ありがとう！

駄が付いてないところが偉いね

「ファミリーの皆は来れなかったので代表がと言っことだ」

嬉しいよー！（泣

PC禁止令出たから更新出来なくなるのにー

「 そうなんですか 」

うん。部活サボってたのがバレたのー

「 ……」愁傷様です 」

いえいえ。自業自得なんで

と言っことで誰か祝って？

happy birthday僕！(後書き)

… お願いします。

にゃん、ムジムジ。

15. いや、それは…ねえ？（前書き）

久しぶりの更新！

今尚PCは使えないので

携帯からの投稿です！

15・いや、それは…ねえ？

という事があった次の日のお話。

波音は応接室で恭弥にこんな物を提出していた。

「…何これ」

「停学届けです。もしかして知りませんでした？」

「…君、僕をバカにしてるの？」

「いいえ？そんなつもりは」

「咬み殺すよ？」

「やめて下さい、冗談ですよ…イタリアに行くんです」

「へえ、そう。行ってらっしゃい」

「素っ気ない…行ってきます」

「あ、そうだ」

「？」

恭弥は何かを思いだすかのように

机から何かを探しだした。

「これ、あげるよ」

ポイと放り投げられた物を見事キャッチする。

「つとと…これは…コート？」

その手に有るものとは

フード付きで、波音が着ると…

口元しか見えないだろう長めのコートだ。

「そう。姿、ばれないようにね」

「たたかい本番の時の為、ですか？」

「…、まあね」

少し笑うと波音は窓の外を見た。

「次の日本はいつになるんでしょうか」

「知らないよ、そんな事」

「酷いですね…恭弥」

「別に？」

…あまり時間がある訳ではない。

つまり、そろそろ行かないと…

飛行機が行ってしまおう。

「そろそろですね。では、また会つときまで」

「じゃあね」

…波音は応接室から出て行った。

出て行ったドアを見ながら恭弥は呟く

「…並中の規則破らないでね」

『並盛中学校規則第三十二条

停学する場合、理由が終わり次第停学を止め、登校する事。』

さて、恭弥と波音ともう1人の話。

それは、ちょうど波音がイタリアに着いた頃。

その人物は見事な嘘をついていた。

「十代目！野球バカ！白川さん！

…今までスンマセンでした！」

…分かっただろうが一応言っておこう。

人物とは隼人だ。

「……！！！？！？」「……」

クラス全員がこの言葉に驚くのも無理はない。

なんせ、あの隼人だ。

いじめていたはずの。

「俺、汐海に脅されてたんです。

『ぼくの要求を呑まないと…そうだな、十代目の命は無いよ』って  
…」

「…そんな事があつたんだ。ごめんね？獄寺君」

「！信じてくれるんすか？」

「信じるに決まってるのな」

「っ…。白川、その…わ、悪かったな」

「大丈夫だし別にいいんだよ獄寺君！それより何で言ってくれたの？」

「確かに。汐海さんにバレたら…」

「それは大丈夫です。あいつ転校するから」

「転校するんだあ、汐海さん。」

「…十代目」

「俺たちの事を思って…こっちこそごめんね？」

「なのなー」

「テメエには言ってるねえ野球バカ！」

いつもの…あの時の様。

「仲良いねえ？」

「仲良くなんか無い！」

「酷いのなー」

隼人は心中で言う。

（十代目、許して下さい、

嘘を今なおついでる事）

さて、これからヴァリアーとの戦いが

始まるつとじているのだが

その前に少し。

波音のヴァリアー生活を少しだけ

覗いて見ましよう。

15・いや、それは…ねえ？（後書き）

見てくれている皆さん方

（少なくとも1人はいるはずだ。）

ほんとスンマセンでした！

携帯だとPCより書く気が無くなるんですねー

と、言い訳を試みたり

携帯でも頑張らないとなー

16・番外編っ！（前書き）

今日ならどはと言ひつじとぞ。

16・番外編っ！

「ベル、そっち終わりました？」

「おう！ばっちりだし」

「マーモンの方は…大丈夫そうですね」

「金、貰うからね」

「え…」

「ムム、冗談だよ。ツケにしてあげる」

「ありがとうございます」

「波音ちゃん、手伝ってくれないかしら？」

「今行きます」

この日ヴァリアーは慌ただしく準備をしていた  
ある人を除いて。

「波音ーこれどこに飾んの？」

「それはテーブルの上くらいに」

「オツケ」

「スクアーロはどこだい？」

「飾りを買って来て貰ってます。そろそろ……」

「ヴオオオイ！」

「ザンザスにばれますよ^^」

「すまねえ」

「いえ、それより買って来てくれました？」

「ああ。ほらよ」

「ん、ありがとうございます。ベル、これそっちに飾って下さい」

「んー」

「波音ちゃんケーキんだけど」

「キルシュワッサー買って来たのでそれを染み込ませて下さい」

「分かったわあ」

「皆さん各自プレゼントは用意しましたね？」

「当然！だってオレ王子だもん」

「僕も用意してるよ」

「私も大丈夫よお」

「俺も買って来たぞお！」

「よし、ぼくも大丈夫ですし…準備は完璧です！」

「……誕生日おめでとう！」

「……」

そう、10月10日は我がヴァリアーボス、

ザンザスの誕生日なのだ。

いつも以上のご馳走や飾り付け

一人一人のプレゼントは…企業秘密にしておいて

それはそれは盛り上がったらしい。

…未成年とか関係無く全員飲んで次の日は皆

…二日酔いだったらしい。

皆が酔いつぶれて眠った頃

ザンザスと波音は2人、これからの話をしていた。

「ザンザス、戦いの時の話なんですけど」

「…白川は好きにしてい、殺しても構わない」

「!?!?! (ニヤッ」

…その言葉、待っていた」

「暇つぶしぐらいにはなる相手だろう」

「なら、いいんですけど」

「せいぜい楽しみにしておけ」

「そうします。あ、そうそう。ザンザス

誕生日、おめでとついでいます」

「…」

波音が部屋に帰った後

「…(アイツは何を隠している…?)」

ザンザスが思っていた事が分かるのは、

そう遅くもない…。

16・番外編っ！（後書き）

途中の波音の台詞、一つだけ  
KHのあるキャラの台詞なんです。  
分かった方は感想に  
書いて下さい！

答えはいつか書きます

後：ツナとリボーンの誕生日

番外編書く気が無いんですけど（敵なんで）  
書いた方が良いですか？

…書こうと思えば…頑張るので

アンケートとまでは言いませんが

ご希望があれば宜しくです

17・波音、王子のティアラ知らね？（前書き）

遅れてすみません。

お知らせをあとがきに書かせて頂きますので

そちらも読んで下さい。

敬語、ローテーションなのは機嫌が悪いだけなので

ほっといて下さい

## 17・波音、王子のティアラ知らね？

なんとなくで飛ばします

波音が来て一週間経ったある日のこと。

「ん…あれ、メール来てる」

ベルの携帯に一件のメールが来た。

相手は波音。そして波音には任務がない。

これは波音が拒否したからだ。

つまり波音は…

城の中に居てるはずだ。

「メール使わなくても良くね？」

内容を見る。すると

「（。。。）」

ベルが固まった。

『僕を見つけて下さい。つか、助けて下さい。ヒントはマーマモンに』

「…マーマモン…姫に何してんだよ…」

「ムム、ちょっと遊んでみただけだよ」

「（。。。）」

「さっきから驚きすぎだよ…」

「いやいやいや、なんでここにいんの？姫に何したんだよ」

ベルの波音の呼び方が姫なのは

…まあ、想像にお任せする。

「書いてる通りヒントを言いに来たんだよ」

「…」

「まず、僕は普通に部屋にいたんだよ」

～～回想～～

「マーモン！！助けて下さいい！！」

「ム、どうしたんだい。君がそんなに慌てるなんて」

「囲って下すわいー」

「…っ」

その時、ドアがノックされた。

「マーモンちゃん、波音ちゃんを見てないかしら」

「いないって事をお願いします」

「…ムム、見てないよ」

「見つけたら教えてねえくん」

足跡が遠ざかっていった。

「…た、助かった…ですね…」

「どうしたんだい？」

「いや、ルツスが『ゴスロリ服作ったから着て』って…」

「ムム、それは災難だったね」

「本当ですよ…（ハア）」

「…波音、ちょっと手伝ってよ」

「嫌な予感しかしないので嫌です」

「じゃあSランクの報酬2倍」やらせていただきます」

「じゃあこれ飲んで」

「?はい」

ゴクン

「なんともな…!?!?」

「ムム、成功だね」

波音はサラサラと消えていく

「城の中のどこかに飛ばされるだけだよ」

「いや、「因みに誰かに見つけてもらうまで透明だから」えええ…」

「ベルにメールでもしたら?」

「…そうします」

~~~~回想終了~~~~

「うわ、波音かわいそー」

「で、波音探しに君が抜擢されたんだよ」

「大体の場所は分かんねえの?」

「廊下や外じゃ無いのは確かだよ」

「ふん」

「声は聞こえる筈だよ」

「おっけ。ししっ 暇つぶしにはもってこいだし」

「じゃあ僕は部屋に戻るから」

こうしてベルの波音探しは始まったのでした。

で、波音視点に。

「どっしまししょうか」

波音がいたのは屋上。

「鍵掛かっていますよ…って事はベル来ませんよ…」

まさかの屋上にいた波音はよく考えてみると

「あー！そうでした！」

ゴンゴン

「携帯ありますもん電話しましょう」

とつかくれんぼなら反則になる事をした。

『もしもし?』

「ベル、いまどこです?」

『電話していいの?』

「駄目とは言われてません」

『まあな。何処にいんの?』

「屋上です」

『げ。鍵かかってるじゃん』

「だから動けないんですよ」

『んじゃそっち行くし』

「お願いします」

とつかやりとりの後、波音が見つけたのは…

「屋上は誰も居ねえ…つまり俺らは見つかってない!」

…どこかのマフィアの生き残りかなにか。

「いや、居ますよ〜屋上居てますよ〜」

透明ですけど。と付け加え

前に貰ったベルのナイフを取り出す。

「銃は勿体無いんで  
シユッ

「ぐああ!」

「馬鹿ですね、僕にやられただけだと思いますって下さい」  
少し間を開けて

「他の幹部ならもっと酷いですよ、多分」

「しっつ ひーめ」

「!!!ベル、来たんですね」

「そりゃあ で、えーとこっち?」

ベルがドアから右斜め前を指す。

「はい、そうですよ」

「んーこの辺!」

ベルが何も無いところに抱きついた瞬間  
パツと波音が姿を現した。

「ふう。ありがとうございました」

「しっつ　大丈夫だし」

「そうですか？じゃあどいてください」

「嫌」

「はぁ…どいてください」

「やだし。だってオレ王子だもん」

「それはあまり関係ないです」

「知らねーし」

「…はぁ」

こんな感じでストーリーが終わる。

さあ、次はいよいよ戦いが……………

始まる

17・波音、王子のティアラ知らね？（後書き）

お知らせは3つあります。

？火、水に中間テストがあるので、更新遅れてしまいました。すみません。

？PCが本格的に壊れたので、PC禁止令が終わっても出来ない可能性が高いです。  
つまり、更新ペースが…

？ヴァリアーとボンゴレの戦いで白川を壊します。が、嫌な方は言っして下さい。

諸事情で更新が遅れた事、本当に申し訳ありませんでした。

これからも見て下さると嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1798v/>

---

光と闇、それが世界。

2011年10月17日01時55分発行